

Title	「哲學」第一輯, 三田哲學會發行
Sub Title	
Author	高橋, 文雄(Takahashi, Fumio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.145- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は、必ずしもその詳細の點において明確でない。他種族は血統において全く全滅してしまつたか、或は征服民族と融合して現日本人構成の要素となつたか、それとも征服民族とはほとんど關係なしに特殊の生活状態を持續してきはしないか、こゝに歴史上、人類學上重大なる幾多の問題が伏在するのである。しかるに從來の日本歴史においては彼等の運命のごときは考慮されず、その生活が如何なるものであつたかは全く不明と言つていい。少くともこの問題に關して權威ある研究の公にされたものはなかつた。それはその研究の極めて困難のためでもあり、また社會における特權階級の生活研究をもつて歴史の能事終れりとなした誤れる歴史觀のためでもあつた。しかるにこゝに紹介しようとする柳田國男先生『山の人生』一卷は、實にこの問題に關する先驅的著述をなすのである。

著者は吾々が昔話や世間話として單に興味本位にききつばなしにしてしまふやうな巷説民譚から人生の悠久とその忍苦とを考へさうして更に多くの文献を涉獵して、こゝに『山に埋もれたる人生のあること』以下三十編に亘つて、吾々のいまだ知らなかつたさうしてほとんど無關心であつた山の人生を展開し説明したのである。その論斷の卓抜はいふまでもなく、その叙述の巧妙と、その資料の怪奇的性質だけでも、學界はもちろん一般讀書界の注意を喚起するには十分である。たゞ著者のあまりに大なる博學は、時として讀者の注意を多岐に走らせ、従つて自序におけるがごとく『面白さうだが、よく解らぬ』といふ場合もないではなからうと思ふが、しかし問題の中心は常に存在するのである。即ち附録

書評

『山人考』はその要約とみることができ。著者は現在の日本人が數多の種族の混成であるといふ説から發足し、その先住民族である國つ神が後二つに分れ、大半は里に下つて常民に混同し、残り山に入り、或は山に留つて山人と呼ばれたとみるのである。即ち先住民族の絶滅の徑路を歸服朝貢、討死、自然の子孫断絶、信仰界を通つての併合、長年月に亘る土著混淆、及び舊狀保持者なる山中の漂泊者の六種に分類し、さうして、わが民間信仰の山の神、中世における鬼、或は天狗の思想、それらと關聯する神隱しの話、かくのごとき神祕的思想信仰の裏に、いかに現實的根據のあること、即ち山人がそれらに關係あることをのべられた。單にこれだけの紹介ではその論旨は徹底せず、また形態的研究をもつて種族判例の唯一方法とみる一派の人類學者からみれば、本書の結論は恐らく危險と思はれるであらうが、たとひ異論ある人々と雖も、わが民間に弘く行はれてゐる思想信仰、或は無言貿易のごとき經濟生活に關しては、つきざる興味と示唆とを與へらるゝのは事實であり、またその自序にのべられた學問に對する著者の主張には、吾々も全く贊同するところである。(松本芳夫)

「哲學」第一輯 三田哲學會發行

哲學が思惟のライスツクであり、其のライスツクが更に思惟自身の發展を要求する限り、其の發展のある程の成果の體系は一の思想として哲學其のものゝ自己發現の體系である。此の思想體系が更に言語の働きに於て發表されたものが即ち哲學に關する

論文となる。夫れ故に論文は一の精神的な勞作の成果として或る意味に於て哲學自身の働を代表するものと考へられて居る。此處に於て哲學を之れ事とする學派或は團體に於て哲學的思索の發表機關としての論文集成を有つ事は當然否正にあるべき處のものである。

此のあるべき處の論文集成が此度慶應義塾大學の哲學科に屬する三田哲學會に依つて發刊されることになつた。「哲學」はこの論文集成に對して名付けられた名稱である。今簡単に其の第一輯に含まれて居る諸論文の内容を紹介して置く。

一、*Transzendente Methode*(川合貞一氏)。カントに依つて基礎付けられた先驗的方法を形式的として、これを更に實質的たらしめんとして現象學的立場から先驗的方法を批評して以てカントの缺點を補ひ、先驗的方法を徹せしめんとするマクス、シエーラーと共に先驗的方法を批評究明したもの、二、「歴史學的勞作と歴史家の個性」(板垣鷹穂氏)は歴史學の性質を其の科學的勞作の具體的な姿のまゝで考察したものである。三、「プラトンの美と藝術とに對する考察」(青木嚴氏)、四、「直接經驗の觀察と觀察態度」(横山松三郎氏)は、心理學構成主義の立場から心的要素の單位を感覺とし、而して此の論理的に構成された概念に過ぎない感覺に心的要素の名稱を與へることの可否、及び感覺的内容が刺戟のフアンクシヨんであり、また屬性が觀察態度のフアンクシヨんであると認めることが誤りでない限り、其の當然の歸結として起る感覺的直接經驗と觀察態度との關係如何を論じたもの、五、「フイヒテの初期に於ける國家思想」(舟田三郎氏)は、初めより完成せる

全體として現はれて居らなかつたフイヒテの國家に關する思想を彼の幾多の論文から研究洞察したものである。

「哲學」は其の目的として廣義に於ける哲學思想の研究及び普及を事とする。徹底的なドグマの排除と、究理を目的とする精神的勞作としての哲學に適ふ爲め内容の粗製濫造を惹起し易い月刊を排して春秋二回の發行として、飽くまで深遠高邁なる思索を流露せしめて、世人と共に哲理に究進せんことを期して居る。

(高橋 文雄)

尊經閣本色葉字類抄

二冊

前田侯爵家の文庫を尊經閣といひ、收藏する所の秘籍奇書甚だ多しと承つて居る。同家と特殊の縁故ある言徳財團では、當主利爲侯の意見を奉じ、閣本中尤も優秀なるものを連續複製する方法を探り、前に元弘本古語拾遺を出版せられたが、引續き今度は色葉字類抄を出版せられた。印刷にコロタイプ版を用ひ、裝訂等に至るまですべて原形を存することを主とせられて居るのは、自分等が隨喜の涙を流す所以である。

色葉字類抄は日本の古き字書の一つで、橋忠兼が天養から治承へかけ、三十年に亘つて補綴したものである。漢字を本文とし、その下に訓又は音を片假名で記し、その最初の假名によつていろは四十七部に分ち、部の内に更に天象・地儀・植物・動物等の二十一門を設けてゐる。假名引と分類體とを兼ねた字書で、主とする所は適當な漢字を求めためであらう。從來寫本でばかり傳はり、